

## 忘れ語り、いま語り

## 『異郷被災』「はじめに」

これは、二〇一五年七月に仙台の荒蝦夷という出版社から刊行された『異郷被災』のために書いた、「はじめに」と題された文章である。本書の副題には、「東北で暮らすコリアンにとっての3・11」とあるように、在日コリアンの人々から聞き書きした被災体験の記録である。荒蝦夷に集うライターたちの協働の仕事であった。わたし自身はプロジェクトチームの一員として、側面から支えただけである。聞き書きという方法によって、東日本大震災を外国人が、とりわけ在日コリアンがどのように体験したのか、それを知るために何をなしたか。聞き書きが大切な方法であることを、あらためて確認することができた。わたしの立場からのとりあえずの総括である。

☆

## 被災者の声を聞き書きで

東日本大震災発生直後から、被災者の聞き書きに取り組んで来た。これだけの災害である。被災体験を記録に残して、それを後世に残さなければならない。ジャーナリスティックな、文学的な記録もあれば体験手記なども、あるいは映像記録もあるだろう。手法を問わず記録を進めなければならないが、私たちが選んだのは「聞き書き」だった。こけには前史があった。

震災の直前までおよそ一八八年にわたって山形県の大学に籍を置き、〈東北学〉を名乗って東北の文化歴史の掘り起こしにあたってきた。その大きな柱のひとつが聞き書きだった。大学の仲間たちや学生たちだけでなく、東北各地に同志を糾合して、聞き書きによる東北の近現代の生活誌を記録した。〈津軽学〉が〈盛岡学〉が〈村山学〉が〈仙台学〉が〈会津学〉がそれぞれ立ち上がり、それぞれの名を冠した雑誌が創刊され、それぞれの誌面で聞き書きがページに刻まれた。その成果が『聞き書き 知られざる東北の技』（野添賢治著／荒蝦夷）や『じいちゃんありがとう』（赤坂憲雄監修／奥会津書房）などの聞き書き集として刊行された。そして山形の大学を離れて学習院大学に籍を移したものの、福島県立博物館館長として、岩手県遠野文化研究センター所長として、さらに聞き書きを続けなければならないと思っていたところに東日本大震災が発生したのである。

震災直後の混乱から立ち直るや、巡礼にも似た被災地への旅を繰り返した。〈被災地〉といっても私にとっては教え子や仲間たちがそれぞれに被災し呻吟する土地である。くまなく旅して知る土地である。聞き書きを始めなければと即座に思った。かつての生活の記録を聞き書きによって留めてきた。今度は〈いま〉を記録して後世に残すべきときである。震災以前からの仲間たちと共に、そう話し合っ、混乱の被災地で聞き書きが始まった。

私たちの聞き書きは「震災体験記」ではない。被災地であつてどのような暮らしが営まれてきたのか、どのように話者がここに生きてきたのから始まらなければ、〈いま〉の持つ意味は伝わらない。短い聞き書きではそれぞれコメントやアンケートに似る。ひとりの話者に時間をかけて、ときには幾度も足を運んで、四〇〇字詰め原稿用紙にして一〇枚を基本とした。とはいえ、この聞き書きの姿勢もまた、震災があつてのことではない。震災以前からの〈東北学〉の聞き書きの基本であつた。

自らも被災したり、家族を亡くしたりもした聞き書きの書き手たち二九人が、それぞれ被災地に分け入った。そしてまずは一〇〇人の聞き書きをまとめたのが『鎮魂と再生 東日本大震災・東北からの声100』（赤坂憲雄編／藤原書店）である。各地で聞き書きははまだ継続中である。震災を経て甚大な被害を受けた宮城県東松島市には地域誌『奥松島物語』（奥松島物語プロジェクト編／荒蝦夷）が創刊され、同様な動きが石巻でも始まりつつあるが、いずれも消え去った町の記憶を記録する聞き書きが大きな柱となりそうである。

## 東北の外国人たち

そのなかで被災した外国人の姿がぼつりぼつりと見え始めた。震災直後、宮城県の新聞「河北新報」に掲載された印象的な写真があつた。宮城県南三陸町。海辺から着のみのままで被災者が高台へと避難して来る。おばあちゃんをおぶっている女性と、そのとなりにもうひとりの女性。撮影は三月二日である。最初は避難の一瞬を切り取った鮮烈な写真としてしか観ていなかった。だが、のちにはっきりしたのは、日本人のおばあちゃんを背負って逃げる中国人花嫁の女性だった。となりの女性もまた花嫁として東北にやって来た中国人女性だった。

アジアからの花嫁たちが東北に入っている。被災したおばあちゃんと被災した中国からの花嫁の写真には、災害列島が負わなければならない日常の問題が凝縮されて現れていた。もちろん東北における外国人の居住者の姿は震災以前から目に入っていた。あるいは、私が勤務していた大学のある山形は、八〇年代に嫁不足の解消のためにフィリピンから女性を招いた。自治体による外国人花嫁の受け入れの最も初期の例である。韓国や中国からの花嫁たちがそれに続いた。既に、各地の学校には日本人とさまざまな国籍の外国人のあだに生まれた児童がたくさんいる。

結婚だけではない。震災以前のことだが、福島県いわき市の古い寺院でこんな風景を見た。東南アジアからやって来たらしい少女といつてもいい年ごろの女性たちが境内をものめずらし気に散歩していた。楽しそうに互いの写真を撮り合っていたが、観光客の気配はなかった。どうやら出稼ぎにやって来て、たまの休日ここにやって来た。中国人研修生を高台に避難させて自らは亡くなった宮城県女川町の水産加工会社役員が存在はメディアを通じて知られたが、三陸沿岸を中心に漁業の現場や水産加工の現場に各国からの労働者が研修生などの名目で働いていた。あるいは留学生として東北にやって来た外国人も多い。雑誌『別冊東北学』や『仙台学』では、そんな東北に暮らす外国人の聞き書きも取り上げていた。

河北新報の写真に象徴されるような、東北に暮らす外国人たちの被災体験も聞き集めなければならないのではないのか。あの大災害は決して日本人だけが体験したわけではない。たくさんの外国人たち、あるいは在日の人たちも体験している。そんな被災者の聞き書きをしなければ、トータルな震災の体験を語り継がないのではないのか。かつて聞き書きなどで出会った東北に暮らす外国人たちが、あのいわきの寺院で出会った少女たちのような〈東北学〉の記憶のなかにある外国人たちが、どのように震災を体験したのか。東北の村や町の片隅に暮らしていた海の向こうからやって来た労働者や花嫁たちがどのように生き抜いたのかが知りたかった。

## 明日の震災のために

東北に暮らす外国人たちの被災体験の聞き書きにも取り組まなければならないのではないかと仲間たちと話し合っていたころ、二〇一一年の秋だったか、福島で震災の小さな研究会に出席した。日本人男性と結婚したフィリピン女性数人が泣きながら体験を語った。まず彼女たちは言葉がわからなかった。日本人なら得られた情報が彼女たちには得られなかった。地震や津波に関する日本人なら知っている基礎的な知識もない。それでなくとも情報が遮断された被災地で、言葉もわからない、知識もないとしたら災害にどう対処できるか。彼女たちの体験から、そんな人たちがどのように生き延びたのかがおぼろげに見えた。例えば、あなたが言葉もわからずに、その土地の深い歴史や文化も知らずにどこかの国にいる。そこで災害に遭ったらどうするか。どうやって逃げるのか。そんな目隠しをされて避難しなければならないような状況に彼女たちは置かれていた。

防災・減災の重要性が語られている。明日なのか、来年なのか、それともその先のいつかなのかはわからないが、次の震災は必ず来る。可能な限り、それに対する準備をしておくべきなのは論をまたないが、そのとき大災害の中の外国人は見過ごされてはいけないテーマだ。これからもたくさんの出自や文化、背景を異にする人たちがこの災害列島で共生せざるを得ない。その人たちに、災害時にどうやって情報を伝達すればいいのか、最低限のルールを作っておかなければならない。情報の断絶はパニックに繋がる。東京など大都市圏にはもっとたくさんの外国籍の人たちが暮らしている。東日本大震災を教訓として、多言語できちんとした最低限の情報を伝達できるシステムを作っておくことが防災・減災のために絶対に必要となる。それなしではパニックが起きかねない。

東北はかろうじてパニックを起こさずに共に生き延びることができた。それは被災地の人たちが「ここは我慢するしかない、そうすれば支援が来る」と情報や思いを共有できたからではないか。言語や情報の問題はありながら、東北被災地の外国人たちは、幸いにも基本的には孤立しなかった。例えば、避難所で不安や不便を感じた外国人はいたにしても、だがそれは、高齢者や障害者をかかえた避難者、さまざまな事情を持ちながら避難所に入った日本人の被災者と同様な事態だった。避難所に入るのが困難な家族をかかえてかろうじて倒壊を免れた自宅の二階などで避難生活を送った被災者も多い。いずれにしても、日本人・外国人に関わらず、東北被災地では避難生活にさまざまなトラブルがあつたのは間違いはない。そもそも避難生活とは平和で安定的なものではない。現在もそんな避難生活を送る二〇〇万人以上の被災者の暮らしを私たちは忘れてはならない。そんななか、外国人被災者が気持ちよく暮らせているとは思えないが、被災の初期状況では必要最低限のトラブルで済んでいたといつていい。東北被災地では明らかな差別や迫害はなかった。そこにあつたのは災害弱者としての外国人居住者の姿だった。

これには東北の地域性があるように思える。東北人の我慢強さが震災直後、さまざまに喧伝された。それがよかったのか悪かったのかは別として、確かに多くの男たちは女性や子供を、あるいはいわゆる災害弱者を優先して避難させた。彼ら彼女らを避難所に入れて、自らは避難所の外で耐えていた男たちもいる。もちろん男たちに限らず、さまざまな善意が被災地にはあつた。かろうじて残っていたコミュニティの力がそれに与っていた。ひとつの避難所にコミュニティごとに入ったところは安定していた。どのような人物がリーダーになったかによっても大きな違いがあつた。また、寺院や神社の宗教施設が初期の避難所として重要な役割を担いもした。外国人避難者も受け入れた。岩手県山田町のあるお寺は地域の避難所となった。大きな避難所に入っていたけど、檀家を中心に地域のお寺に全員が戻って、一か月ほど共同生活を続けた。東北のコミュニティがお寺や神社などの宗教施設が中心となって形成されているのがあらためてよくわかった。東北のコミュニティの宗教的核に気づかされた。本来はお寺など地域の宗教施設は、地域が危機に陥ったときに境内を開放して炊き出しにあたり、医療などを提供する場だった。東北人の我慢強さを、コミュニティの力が支えた。公的な避難所だけでなく、このような地域独自の避難所があつたから、なんとか生き延びることができた。東北人はこれを誇つていい。

そして、これからのコミュニティは国籍やそれぞれの立場を超えて作られなくてはならない。それを象徴していたのが、南三陸でおばあちゃんを助けた中国からの花嫁たちであり、女川で中国人研修生を助けた水産加工場の経営者ではなかったか。同様なことが、たとえば東南海地震や首都直下型地震に見舞われた地域、特に東京などの都市部で可能なのか。東日本大震災をはるかにしのぐであろう極度の混乱のなかで、今回の東北被災地の人たちの我慢強さや善意を、コミュニティの力を期待できるだろうか。

関東大震災の暗い記憶を蘇らせてはならない。そのためにも東日本大震災下にあつて、被災を経験した外国人の記録を残し、それを未来にもかならず襲ってくる災害に対処するための記憶としたい。そんな思いがいくつも重なって、外国人被災者の聞き書きを進めるべきだと思ひ始めて、今回は公益財団法人「韓昌祐・哲文化財団」の助成によって在日韓国人や結婚によって東北にやって来た韓国人の聞き書きに着手できた。私たちだけでなく、さまざまなNPOや研究グループが「災害と外国人居住者」をテーマに支援や調査を続けている。これからもこのテーマにこころを寄せつつ、それらが来るべき明日の災害に対処するための礎となることを祈る。

## さまざまな〈被災〉

今回の聞き書きに私個人はほとんど動けなかった。震災直後から福島県立博物館館長として、岩手県遠野文化研究センター所長として、震災後の対応に追われた。また、東日本大震災復興構想会議委員、福島県復興ビジョン検討委員会委員、飯館村復興計画推進委員会委員長、一般社団法人ふくしま会議代表理事など、東北被災地の復興に関わる立場ともなつて、実際の聞き書きの現場に立つことはなかなか叶わなかった。聞き書きは、先に述べた震災以前からの同士たちや『鎮魂と再生 東日本大震災・東北からの声100』に参加してくれた聞き手に加えて、東北学院大学の郭基煥教授（同大経済学部共生社会学科長／同大災害ボランティアステーション所長）を中心としたチームが行った。

郭教授は六年間、名古屋から仙台市の同大へ。震災前には地域のコリアン社会とはあまり交渉がなかったが、自らが知る西日本の状況とは違うものを感じた。コリアン社会の組織の規模も動きも小さい。東北の人口そのものが多くないことを思えば、また、大都市がほとんどないことを思えば、これもまた不思議ではない。自らは東北を特化したテーマとして研究に取り組んでいたわけではなかったが、郭教授は東北のコミュニティが持つ地域的・排他的な同調圧力が働いているのではないのかとの印象を持ったという。そして、東日本震災が起きた。郭教授は同大災害ボランティアステーションを拠点に被災地支援に奔走、同時に外国人被災者の支援活動にも取り組む。これらの活動を通じて、いつまた起こるかもしれない大災害のために、外国人被災者の体験の調査・研究が必要と痛感した。外国人被災者支援にあたるNPOや研究者と協力して、在日コリアンを中心に調査を進めながら、私たちの聞き書きに参加した。聞き手となったメンバーは岩手・宮城・福島三県の沿岸被災地に赴き、それぞれ話し手に向けた。その記録は四年目の三月に取りまとめられる運びとなっている。

四年を過ぎて、郭教授は東北にかろうじて残っていた地域社会の存在が、東日本大震災下の外国人被災者の体験に現れているのではないかと見る。長く東北に暮らす在日コリアンや結婚によってこの地に暮らすこととなった韓国人は、それぞれの地域社会の一員として震災を体験した。平時には同調圧力と受け止められかねない地域社会の持つ力のなにものが、危機にあつて機能した。それが深刻な差別や孤立を生まなかった要因のひとつなのではないか。ここには東北の近代の問題もまた関係するかもしれない。日本近代の「負け組」として歩んできた東北人の地域社会が、どのように在日コリアンを、外国人居住者を受け入れてきたか。その結果が、今回の在日コリアンをはじめとした外国人被災者への対応に、それぞれが知らず知らずのうちに影響を与えたのではないかと……。郭教授のこのような分析は、私たちが〈東北学〉を通じて深めてきた東北への理解と重なる認識がいくつもある。大きな災害は平時には見えないその社会の貌をあらわにするとさまざまに指摘されているが、地域社会と外国人被災者の問題もまたそのひとつなのだ。被災地の在日コリアンを中心とした外国人被災者の体験記録は、これからの被災地の外国人被災者への対応だけでなく、そこにある地域社会の素顔をまた照らし出す。とすれば、東北以外の土地、別の地域で大災害が発生したとき、地域社会の外国人被災者になにか起きるのか。今回の東北の在日コリアンの経験が、それを考えるためのひとつの鍵となることを願う。なお、それぞれに帰国の道を選択したニューカマーを中心とした人々もまたいる。これには福島第一原発事故が影を落としている。原発事故の悲劇はまだ進行中である。地震・津波の被災とはまた別の視点で論じるべき、大きな問題として残る。

私の許に折々に届けられたこれらの聞き書きを読んでも思うのは、予想していたこととはいえ、語り手各々の背景の多様さである。さまざまな事情でさまざまな経緯で東北に定着するに至った朝鮮半島の人たちが、あの日の東北にいた。「津波が来たら家族であつてもてんでんばらばらでいいからまずは逃げる」という「津波でんでんこ」の教えが注目された。だが、その瞬間だけでなく、日本人であろうと外国人であろうと関わりなく、被災からの再起もまた「てんでんこ」である。さまざまな事情を抱えた人たちが、それぞれに再起を果たさなければならない。さらにいえば、震災以前の生もまた「てんでんこ」であり、それをある一瞬あぶり出すのが災害なのかもしれない。そして、その「てんでんこ」を総体として見つめて、災害列島の未来への糧となさなければならない。

聞き書きはいまも続く。あの日から四年。東日本大震災は被災地の外ではすでに過去のニュースかもしれない。だが、そこに生きる人々にとって〈被災〉はいまだ生々しい日常の現実である。福島第一原発の廃炉まで見据えれば、終わりは見えない。聞き書きもまた、さまざまな話者を相手に続くはずだ。聞き書きだけではなく、映像なども含めた多様な手法による東日本大震災の記録は、いま私たちが残すことのできる未来への伝言であると信じている。